

# 記憶がひらく回路

エミール・オリヴィエとハイチ

真 田 桂 子

## ハイチ系ディアスポラ作家とケベック

「私はハイチを離れたが、ハイチは私から離れはしない。」<sup>1)</sup> モントリオールに住むハイチ出身の小説家エミール・オリヴィエは述べている。

すでに日本に紹介されているカリブ海仏語圏の作家をあげれば、マルチニック出身でネグリチユード運動を唱えたエメ・セゼールや、同じくマルチニック出身でカリブ海人としての「アンティル性」を主張したエドワール・グリッサン、そして「クレオール」宣言をおこなったコンフィアンやシャモワゾー、あるいはグアドループ出身で現在はニューヨーク在住のマリーズ・コンデなどがある。マルチニックやグアドループなど、フランス海外圏出身者の多くが本国フランスに渡ったのに対して、カリブ海仏語圏のなかでも革命を経てフランスから独立したハイチでは、1957年に成立したフランソワ・デュヴァリエの独裁政権に抵抗し、その政治的無秩序と経済的混乱を逃れるために、多くの人々が、フランスやアフリカ諸国、あるいはアメリカやカナダの仏語圏であるケベックなどへ移民した。

デュヴァリエリズムは、都市部と地方との格差の是正、中産市民層の拡大、国民的アイデンティティの顕揚などをスローガンに掲げて登場しながら、ほどなくこの国の歴史上、最も血塗られた独裁政権としての実体をあらわにした<sup>2)</sup>。

こうした状況においてとりわけケベックのメトロポリタンであるモントリオールには、ニューヨークとならんで多数のハイチからの移民が入り込んできた。さらに流入した知識人のなかには多くの作家も含まれていた。モントリオールで活躍する代表的なハイチ系ディアスポラ作家としては、エミール・オリヴィエのほかに、ジェラルド・エチエンヌ、ダニー・ラフェリエール、それにジャーナリストとして活躍するアンソニー・フェルプスや詩人のジョエル・デ・ロジエなどがあげられる<sup>3)</sup>。これらの作家の作品に共通するテーマは、祖国を離れることによって生じた故郷喪失者としての流浪感や根こぎ感、新しい移住の地での疎外感や孤独、あるいは祖国ハイチの体制に対する政治的な批判...などであろう。それぞれの作家は、各々のスタンスとスタイルにおいて、断ち切られた祖国とのつながりを確認しようとしているように思われる。

## エミール・オリヴィエと「記憶」

### 1. 強いられたテーマ

エミール・オリヴィエは、おそらく、世界的にも最も著名なハイチ系ディアスポラ作家の一人に数えることが出来るであろう。オリヴィエは、1940年ハイチの首都ポート・オ・プリンスに生まれた。パリ、ソルボンヌ大学で心理学と文学を学んだあと、1965年、当時のデュバリエ独裁体制を逃れてケベックに移住する。モントリオール大学で社会学の博士号を取得し、母校で教鞭をとりながら作家としてデビューする。出世作となった『母よ 孤独よ』*Mère-Solitude* (1983)、『パッサージュ』*Passages* (1991)、『封印された骨壺』*Les urnes scellées* (1995) など、異郷の地ケベックに移住して数十年が経過した現在まで、オリヴィエはその作品において一貫して祖国ハイチを描きつづけてきた。自らの記憶に生き続ける祖国へのこだわり、くり返し想起されるハイチの情景と母国への思い…。『記憶』とは私にとって強いられたテーマである<sup>4)</sup>と作家自身が述懐しているように、このハイチへの「記憶」はまぎれもなくオリヴィエ文学の中核を成している。

たとえ、先に述べたようなハイチが抱える特殊な事情が背景にあることが明らかであるとしても、なぜオリヴィエはこれほどまでにハイチを描きつづけるのか？オリヴィエにとって、ハイチを思い起こすこと、すなわちその「記憶」とは、どんな意味を持つのであろうか？オリヴィエ自身、最近発表したエッセイで自らが辿ってきた軌跡を振り返り、これまでの歩みを新たな時代の潮流に照らし合わせて位置づけようと試みている。ここでは、小説『母よ 孤独よ』を中心に、エッセイ『標定』*Repérages* (2001) と筆者が直に作家に対して行ったインタビュー (2001年9月、モントリオール) を手がかりに、オリヴィエ文学を特徴づける「記憶」の意味の一端について探ってみたい。

### 2. ハイチ、わが苦悩：ノスタルジーと鎮魂

オリヴィエの小説『母よ 孤独よ』は、祖国ハイチの歴史をある一族の凋落の歴史に重ね合わせて描いた異色の物語である。かつては栄華を誇り今は没落した一族の若き末裔ナルセス・モレーニの母親は、おぞましいまでの混乱と流血のさなかで不可解な死を遂げる。ナルセスの母ノエミは、時の専制君主トニー・ブリゾーを殺したかどで、罵倒と嬌声が飛び交うなか群衆の目で縛り首にされたのだった。物心もつかない頃に処刑された母の謎をめぐり、成人したナルセスは様々な人からの証言を追う。一家に古くから仕えてきた召使いのアブサロン、ノエミの姉でナルセスの伯母にあたるオルタンス、ノエミの妹で精神を病んでいるエバ・マリア、共産主義者のインテリで暴君トニー・ブリゾーを転覆しようと企てるが、パリからハイチに帰国したあと捕らえられるノエミの弟ガブリエル、そしてノエミの愛人でナルセスの本当の父親ではないかと推察される考古学者のベルニサル…これらの登場人物の記憶をとおして、遠い過去の事件の全貌が次第に手繰りよせられる。そしてそれにもなって、目を覆うばかりの暴力と無秩序が横行するハイチの姿が浮き彫りにされていく。ベルニサルは太古に滅びた恐竜の逸話にかけて政権批判を目論むが、聴衆の目の前で敢えなく暗殺されるのだった。そして物語の核心であるノエミの死の謎が明かされる。ノエミは、当局に捕らえられた弟ガブリエルの釈放を条件に、トニー・ブリゾーの手に落ちる。そして自らの手で専制君主に向かって銃弾を打ち込んだのであった。

…トニー・ブリゾーが悦楽の頂点に達したときに、ノエミはベッドの際に括りつけられていたピストルをつかみ、ブリゾーの脳天に向かってひき金を引いた。その直後、警官たちがドアをうち破り寝室に入ってきた。彼らは、ノエミ・モレーニの体の上に腹ばいになっているト

ニー・ブリゾーを見つけた。ノエミは淡々といった。「入ってきて欲しくはなかったわ...こいつの屍の上を、ネズミやアブラ虫や蟻がはい回って食いちぎるのを見とどけるまでは...」<sup>5)</sup>

このバロック的なエネルギーが充満する小説でオリヴィエが描き出そうとしているものは、今もって民主化を果たしきれず、混乱と貧困の淵にあえぐ祖国ハイチの現実にはかならないであろう。

毎朝目を覚ますたびに、私は胸が締めつけられる。...その思いは、毎朝私の胸にこみ上げてくる。ああ、ハイチ、ハイチ、その苦しみやいかに...<sup>6)</sup>

横溢するバロック的な世界から同時にあふれ出してくるものは、混乱した祖国を見捨てざるを得なかった知識人の痛恨と鎮魂の思いであろう。その一方で、描写される母親の体から立ちのぼるラベンダーの香りのように、小説の文体は驚くほどに澄んだ叙情も漂わせている。幼い頃の甘美な思い出がつまった失われた楽園としてのハイチ、すなわちここに描き出される祖国の「記憶」とは、鎮魂とノスタルジーにほかならないのである。

さらにここで浮き彫りにされるのはハイチの光と影である。目を覆うばかりの暗澹たる現実と、その一方で絶望に決して屈しようとはしない人々。

「...なんて美しい国なんだ、けれども、あなた方はなんと貧しいんでしょう？これだけ困難な状況のなかで、あなた方はそれでも快活で、喜びにあふれてさえいる。その秘密は何なのですか？」...「旅の人よ、どうか私たちの喜びに触れないで下さい。それははかない花びらのようなものです。...私たちは日常的に死ととなり合わせに生きています、それでも私たちは言い表せない喜びのなかに生きています。なぜなら私たちは、心の奥底から湧きあがる密やかな希望をもちつづけているからです」<sup>7)</sup>。

ハイチの人々の「心に宿る密やかな希望」とは、「踏まれても、踏まれても、決して根絶やしにすることの出来ない雑草のような希望」<sup>8)</sup>なのである。

### 3. 歴史に抗する「記憶」

また、この小説の語りの構造とスタイルからは、オリヴィエの「記憶」のもう一つの断面が明らかになってくる。母の死という一つの事件は、複数の人物の口を通して語られる。物語の核である母をめぐる謎は、うわさや記憶の断片をつなぎ合わせることによってはじめて解き明かされるのである。モレーニ一家の歴史もハイチの流血の歴史も時間軸にそってつまびらかになっていくのではなく、あくまでポリフォニックで個人的な断片と証言をもとに構成されていくのである。さらに、例えばエバ・マリアの予言的な妄想や、ナルセスが祖父から聞かされる言い伝えのなかには、先祖代々から受け継がれるハイチの民衆の集団的な「記憶」が随所に織り込まれている。オリヴィエは、「書くことによって、冷ややかで非人称的な『歴史』に立ち向かわなくてはならない」<sup>9)</sup>と述べている。そうであるならば、オリヴィエにおける「記憶」とは、大文字の歴史に立ち向かうこと、つまり歴史に抗する民衆の側からの証言である、とも言えるのではないであろうか。

## グローバル化と「記憶」

### 1. 喪の作業としての「記憶」

オリヴィエは、最新のエッセイ『標定』において、自らのこれまでの歩みを振り返り、ハイチへの「記憶」の意味を問い直そうと試みている。

はじめは、失ったものを記憶しておくことが何よりも重要だと思われた。なぜなら、記憶があるからこそこれまでの自分と繋がっていられるのだから。...記憶を失うこと、それは名前を失うことのように、自分自身のアイデンティティに取り返しのつかない傷を負うことであるように思われた<sup>10)</sup>。

おそらく多くの移民と同様に、オリヴィエの場合も、当初、祖国の「記憶」にしがみつくなければならなかったのが、失われていく自らのアイデンティティを救済しようとする試みに他ならなかったと言えるであろう。

さらに年月を経るにつれ、故郷ハイチでの思い出に移住の地であるケベックでの生活が新たに刻み込まれていくなかで、複数のアイデンティティが自らに宿っていくことを自覚する。

...複数のアイデンティティを同時に引き受けながら生きていくことは可能ではないかと思われた。...私自身変貌し、その都度アイデンティティは調整される。その結果、これまで経てきたあらゆる「場所」がせめぎ合う複数の「自己」が生まれるのだ<sup>11)</sup>。

このように複数性になった新しい自己の認識において、祖国ハイチへの思いは新しい自己を生み出すための「喪の作業」へと転化する。おそらく先に見たような鎮魂やノスタルジーには、そうした思いが込められていると思われる。しかし、オリヴィエにとっての「記憶」とは、決して後退的な作業を意味するものではないであろう。「記憶」すなわち「想起する」とは、単に過去を振り返るというのではなく、すぐれて現在に結びついた創造的な作業を意味するものだからである<sup>12)</sup>。実際、オリヴィエは述べている。「記憶にむかって働きかけねばならない」<sup>13)</sup>。組織的な「忘却」という、現実から目をそむけさせようとするある種の抑圧に対して、あるいは冷ややかな非人称の「歴史」に対して、オリヴィエは「記憶」という行為によって対抗しようとするのである。

### 2. 回路をひらく「記憶」

さらにオリヴィエは、グローバル化が進捗する現代社会における移民作家の位置づけや、あるいは彼女らがもたらす「記憶」の意味についても、きわめて興味深い考察を行っている。すなわち、オリヴィエは「民族、国家、領土といった三位一体が崩れたグローバリゼーションが伸展する今日、政治的な意味での国家と文学的な空間とのあいだに不一致が生じている」<sup>14)</sup>と主張する。そのなかで、自らを「移民作家」と捉えるよりも、むしろ「越境文学」の担い手としての「越境作家」<sup>15)</sup>であると考え。そして、そうした作家たちの役割において重要なのは、過去と現在、此处と彼方の境界を越え「対話」しつづけることにありと主張する。とするならば、「越境作家」における「記憶」とは、まさにこの対話を可能にする回路をひらくものに他ならないのではないだろうか。

オリヴィエはまた、グリッサンのいう「関係の詩学」にもとづきながら、「根」をもつことより、辿ってきた「道程」に依拠するアイデンティティの考え方を支持して、そのなかで生まれてくる雑

種的で自由な個人という新しいアイデンティティのあり方を積極的に肯定しようとしている。辿ってきた道のりの複数の場所の痕跡，すなわちその記憶を刻みつけた「越境の人々」こそ，グローバル化とクレオール化の現代を象徴する落とし子なのである。

ここで概観した内容は，別の機会に，オリヴィエの作品に即しながらさらに詳しく検討をおこなう必要があるだろう。いずれにせよ，オリヴィエのいう「越境作家」の「記憶」がひらく回路において立ち上がる，複数の「時」と「場所」を刻みつけたポリフォニックな声こそ，新しい意味での「地球市民」<sup>16)</sup>の到来を予告するものであるのかもしれない。

## 注

- 1 ) Emile OLLIVIER, *Repérages*, Leméac, Ottawa, 2001, p.94.
- 2 ) Claude MOISE et Emile OLLIVIER, *Repenser Haïti*, Montréal, CIDIHCA, 1992, p.36.
- 3 ) オリヴィエ以外の作家とその代表作をここにあげるとすれば，  
Gérard ETIENNE, *Le Nègre crucifié*, 1974, Dany LAFERRIERE, *Comment faire l'amour avec un nègre sans se fatiguer*, 1985, Anthony PHELPS, *Mémoire en colin-maillard*, 1976, Joël des ROSIERS,
- 4 ) この言及は，2001年9月，オリヴィエの自宅において，筆者がオリヴィエにおこなったインタビューにおいてのコメントである。
- 5 ) Emile OLLIVIER, *Mère-Solitude*, Le Serpent à Plumes Editions, Paris, 1994, p.181.
- 6 ) Emile OLLIVIER, *Repérages*, Leméac, Ottawa, 2001, p.65.
- 7 ) Emile OLLIVIER, *Mère-Solitude*, Le Serpent à Plumes Editions, Paris, 1994, p.239.
- 8 ) Emile OLLIVIER, *Ibid.*, p.239.
- 9 ) Emile OLLIVIER, *Repérages*, Leméac, Ottawa, 2001, p.89.
- 10 ) Emile OLLIVIER, *Ibid.*, p.21.
- 11 ) Emile OLLIVIER, *Ibid.*, p.24.
- 12 ) 例えば港千尋氏は，「記憶される現在」すなわち「...出土品ではなく発掘現場そのものが記憶」であり「記憶を現場としてとらえる卓抜な見方...」を提示している。港千尋，『記憶 「創造」と「想起」の力』講談社メチエ，1996，p.233.
- 13 ) Emile OLLIVIER, *Repérages*, Leméac, Ottawa, 2001, p.95.
- 14 ) Emile OLLIVIER, *Ibid.*, p.100.
- 15 ) Emile OLLIVIER, *Ibid.*, p.69.
- 16 ) オリヴィエは，先に言及したインタビューにおいてこの「地球市民」という考え方に触れている。また，別の機会に次のようにも述べている。「誤解を懼れずに言えば，移民とはすなわち，新しい人類だと言えるかもしれない。」S. Giguère, *Passeurs culturels, — Une littérature en mutation —*, IQRC, Québec, 2001, p.45.

エミール・オリヴィエは，2002年4月26日から28日まで，一橋大学言語社会研究科が主催するシンポジウム「文明の未来 混成化か，純化か」に出席するため来日する予定である。

(2002年1月18日受理)